

20号記念に寄せて

竹内信夫

『比較文学・文化論集』が20号を出すという。一つの節目を感じたのであろうか、記念号という気持ちで湧いて出たものであるうか、あるいはこの辺りで一度歩んできた道を振り返ってみたいくなったものであろうか、名ばかりの「顧問」になっている私に20号記念企画の編集責任者である深見さんが巻頭言を寄せて欲しいと言ってきた。何故、と思ったが、考えてみれば私はこの小さな同人誌の「顧問」だったのだ。怠け者の「顧問」としては、忸怩たるものを感じつつ引き受けることにした。

それは、20号、と聞いて心中にある種の懐かしさに似た感慨が催したからである。ここに回顧めいた小文を綴って責を埋めたい。

振り返れば、この小さな『論集』が産声を挙げたのは一九八五年の春。私が駒場の比較研究室のメンバーに加わる前のことである。そのときの「顧問」は芳賀徹先生。芳賀先生は私などと違って名実ともに整った立派な「顧問」であって、「金

素雲の訳詩一篇」を論じた文章を寄稿しておられる。そればかりか、実はこの雑誌の産みの親でもあったらしい。

最初の月号には、古田島洋介とか村上孝之、三浦俊彦や牛村圭というような、今ではそれぞれ異なった分野で活躍する、そして当時から一筋縄ではゆかない曲者たちが名を連ねている。なかに、小倉泰の名も見えており、その名を見出したとき、この若くして急逝した優れたインド研究者への深く激しい哀惜の念を抑えることはできなかった。今は同じ研究室で同僚となった今橋映子も五十頁に及ぶ、この小雑誌の枠をはみ出しそうな長大なロマン・ロラン論を、それまでは年二回の刊行であったものを年一回の合併号にした一九八七年の第五号に載せている。今をときめく小谷野敦の名も見える。

この年に私は比較研究室のメンバーに加わった。それ以後は間近でこの雑誌の盛衰を見てきた。盛衰というのはこうである。八九年の第7号は内容はともかくも雑誌の体軀はかなり瘦せた（編集責任の加藤百合の苦勞が偲ばれる）。初期の主

要メンバーの多くが世に出たためであったかもしれない。その後一年ほどの空白があつて九一年の第8号は旧に復す。翌年の第9号は再び細身になって、その後一年の休刊。世代交代がこの間にあつた。新世代の田中、田村、西原が本格的に登場してくる九四年（第10号）からが、この雑誌の第二期に入る。「顧問」もこの頃からは川本皓嗣先生である。以後、毎年一号のペースで刊行は順調に継続されてきた。

世代交代の後、雑誌の内容にも大きな変化が現れてくる。特筆すべきことは、年ごとに外国人留学生の寄稿が多くなってくることであろう。これには同時期に東京大学の大学院重点化が進展し、研究室に多くの外国留学生が学ぶようになって来たことと無縁ではない。

第7号に既に谷崎の『芦刈』を論じた林容澤は早い例であるが、その後、崔官、金光林、テレングト・アイトル、二ナ・長谷川、傅澤玲、朴一昊、李秉鎮、たちが続く。韓国の学生が多いが、彼らは皆学位を取得し帰国して、母国の大学で教鞭をとり、日本研究者、比較文学比較文化研究者として学会でも大いに活躍している。中国からの金光林、アイトルは日本の大学で教えている。こうしてみると、この『論集』は小なりと言えども、並みの同人誌にはない国際性を備え、国際的な学术交流にも貢献してきたことがわかる。

新世紀に入って、この雑誌の編集は、現在なお比較の大学

院に在籍している学生諸君の手に委ねられている。何もしない「顧問」が、声に出して叱咤激励をせずとも、立派に世代交代を重ね、成長を続けているのである。親がなくとも子は育つ、とはこのことであろう。自分たちが書き、自分たちが編集し、自分たちが刊行する。この種の多くの雑誌が現在では研究室の指導・支援のもとで編集・刊行されているのに対して、この『論集』はあくまで自力本願を捨てない。自力本願者である私はこれが嬉しい。

寄稿の多くが修士論文の成果を発表する文章であるのは、今も昔も変わりはないのであるが、その扱う分野、テーマは以前にもまして多様であり、豊かである。文学、思想、芸術、歴史と普通ならばいくつかの学科に分立するはずのものが、ここでは一つの紙面に並び立っている。これもこの雑誌のユニークなところである。

そこに聞こえてくるものが、必ずしも耳に心地よいハーモニーであるわけではないが、異質のもの、多様なものが衝突し、闘ぎあう相互作用のなかで発する多元的な音響は、私の耳には、やがて来るべき学問の地殻変動を予兆させるものと聞こえる。考えること、書くこと、考え続け、書き続けること、それが生きることにとって無意味でないことを信じる若く力強いこの持続を、私は祝福したい。

（『比較文学・文化論集』顧問）